

海軍航空

海軍航空隊整備兵として

福島県 瓜生市郎

私は大正十二（一九二三）年八月十四日、旧熱塩村赤崎部落の農家の長男として生まれ、わが家は祖父母、父母、そして弟三人妹四人の十二人家族でした。

当時は戦時体制下で、銃後は食糧増産で、高等小学校を卒業すると、家業の農業に従事していました。週三日の青年学校では軍事教練等にて、退役された指導員の方から銃の撃ち方から規律、訓練、銃剣術とあるいは阿賀野での水泳訓練等をやっていました。

昭和十八（一九四三）年三月、兵隊検査で甲種合格となり、私は陸軍に入れると思っていましたら海軍と言われ、心にとまどいがあつたのですが、命令とあれば致し方ないと覚悟を決めました。私の郷里は会津盆地の北部にあり海など見たこともなかったのです。春の農作業が始まり田植えの準備で多忙な時期である六月五日、横須賀海軍郡山第一航空隊に入隊せよと通達されました。

残りの作業は両親に頼み、喜多方駅より歓呼の声に送られて郡山航空隊の営門を入りました。直ちに編成となり、私は第二分隊第十三班に配属となり、分隊長は増田中尉、班長

は加藤一等整曹でした。ここで初年兵の教育を受けましたが、航空兵も歩兵の一般教育と同じく、これにまた整備兵としての教育も加わり、なかなか大変でした。

また内務班のしごきの厳しさは並大抵なものではなく、ビンタは第一目から始まりました。平手打ちは歯を喰いしばって我慢もできたのですが、革のスリッパ、次には編上靴での顔面殴打では顔面が変容するすさまじさです。

あるいはウグイスの谷渡りではテーブルの下を上下にくぐっては「ホーホケキョ」と鳴かされる。蟬のまねをして柱に昇って三十分「ミーン、ミーン」と鳴かねばならぬ、まるで人間扱いではなく情けなく思ったものです。

このような軍隊教育は当時は全軍に通例となっていました。同年八月、普通科飛行機整備練習生として飛行機の整備修理等の基礎教

育訓練を積みながら同年十一月卒業となりました。

卒業すると今度は愛知県豊橋海軍航空隊に転属、第十二分隊第二十三班に配属となり、特別機整隊（特攻隊の特攻機の整備）の任務に着きました。この特攻隊にはまだ若い志願兵の者達が爆弾を抱えて敵機に体当たりするのだと言う。その飛行機を整備して飛び立たせてやるという事を考えると何とも言えない心境でした。

戦況は刻々と悪化し、本土空襲も日毎に増し、B 29 爆撃機の爆弾投下で豊橋の兵舎も破壊され、鉄筋コンクリートの建物も粉々になって吹き飛んで大きな穴ができる。またグラマン機の機銃掃射で数人の兵隊と民間人も犠牲になったようでした。

その後、数回の少数機の夜間空襲があり、被害は多少出ましたが、本格的な大規模空襲は、昭和十九年九月三十日から始まったB 29

七十二機による大空襲でした。東京は焼け野原と化しました。

舗装された道路上へ何トンとも知れぬ爆弾が投下され、水道管が破裂して、またたく間に水が湧き出ました。空襲の恐ろしさを目のあたりに見ました。私達は空襲で身を守るため個人個人が蛸壺壕を掘って、空襲となると自分の壕に入っているのですが、運の悪い者は壕に直撃弾を受け粉々に飛ばされて、高い松の枝に頭や脚が引っ掛かっているという凄まじい惨状等も目撃しました。

昭和十九年九月三十日の大空襲以後、十月に入ると、大空襲は回を重ねました。得意の絨毯爆撃の戦術でした。敵の戦法は、近代戦の花形である飛行機で日本軍を完膚なきまで翻弄して、もう大丈夫という所で上陸用舟艇によって上陸するという用心深さでした。

このようにして、南方の島々は玉砕あるい

は撤退という戦況となり、広島には新型爆弾が投下されたと言う事で、本土は東京はじめ各大都市はほとんどが焦土と化し、戦いはもうこれで終わったという行為に皆苦しんだに違いありません。

特攻隊員とは空中だけではなかったのです。海原を走る舟艇に爆弾や爆雷を積み、時速二〇ノットで敵艦に体当たりする水上特攻隊員もいました。そして小豆島で訓練を積んでいました。

全身五、六メートルの耐水ベニヤ板製のボートに自動車用のエンジン（六十馬力）を付けただけの兵器で特攻自爆するという。しかし実際には戦果は見られなかったと隣町のこの水上特攻隊員であった川上君から後ほど聞かされました。

来る日も来る日も空襲に明け暮れる中、しかし特攻機の整備修理に追われていました。横須賀、呉、舞鶴と転属、部隊は人的、物的

損害を避けるため福井県三国飛行場を避難先として利用していました。切迫した状況はひしひしと伝わり、さまざまな情報が間断なく乱れ飛んでいるようでした。

遂に八月十五日、終戦の大詔が発せられました。玉音放送は途切れ途切れで、よくは聞き取れなかったのですが、敗戦と判り、皆食事を取る者もなく、ただ呆然と空を見るのみでした。そして部隊内は重苦しい雰囲気になりました。

私達は、外地の戦地でなく、内地勤務のみだったので、昭和二十年十月、富山県三河から列車に乗り喜多方駅に着いたのが午後八時頃でした。

駅から四キロもある道を歩いて帰りました。夜目にも周りの田圃では、もう刈り取られた稲穂が棒^{ぼう}叉^さ手に立てられ、乾燥している、変わらない懐かしい風景が見られました。

やっとの思いで生まれ故郷の実家に辿り着

きました。「只今！」と玄関で声を掛けたら「ハイイ！」と妹が出てきて「アラ、兄ちゃんじゃない」「お父さん、母さん、兄ちゃんが帰って来たよ」と大喜びで、一晩中夜の更けるのも忘れて話し合いました。

「国破れて山河有り」、ここ盆地の故郷には爆弾一つ落ちませんでした。B 29 爆撃機一機が、近くの慶徳村新宮部隊の田圃に墜落したんだよ」と聞かされました。

私は第一線の戦場には行かなかったけれど、職業軍人が召集によって犠牲を強いられることは、戦争であれば、やむなしとも考えられるが、戦時体制下の若い青少年達を特攻と言う形で死に追いやったことはあまりにも気の毒でならない。

今の青少年にこのような悲劇を後世に繰り返してはならないと思う。そして今日の培われた現在の平和の尊さを永遠に祈念するものです。